

<特集ワイド>近代化のなかで変貌する伊勢神宮と出雲大社

著者	グリーン ジョン
雑誌名	歴史読本
巻	888
ページ	112-117
発行年	2013-06-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1368/00006076/

近代化のなかで変貌する 伊勢神宮と出雲大社

明治政府が進める国家の近代化に、いやおうなく影響をうける伊勢と出雲。だが、その両者の姿は、まさに対照的なものだった

国際日本文化研究センター教授 ジョン・グリーン



暗殺

明治二十二年（一八八九）二月十一日は、明治憲法発布の日として、日本近代史上に特記すべき一日である。そして、同日の朝に起きた一件は明治の伊勢を理解する鍵となる。それは、文部大臣森有礼の暗殺。西野文太郎という男がその朝森家を訪れ、至急伝えたいことがあると言い、玄関まで入れてもらった。憲法発布の儀礼参列のため支度中の森が現れると、西野は飛びかかり、刃物で突き刺した。森の怪我は致命的で、いつぼうの西野もその場で警衛に斬殺された。

森が前年、宇治山田に立寄り、外宮参拝の際「不敬」を働いたと噂されたのが暗殺の理由である。西野の「暗殺趣意書」によれば、伊勢大廟は、万世一系の我皇

キーワードで読み解く伊勢神宮と出雲大社 ▼ 明治

室の本源たる天祖、天照大神がやどる宗廟だ、これより聖なるところはない。森が靴を履いたまま正殿に昇った不敬は、皇室を蔑如し、国家を滅亡に陥れる。

暗殺が起こりえたのは、明治政府が伊勢神宮をその聖性の源とし、また（神宮の存在が権威づける）万世一系の神話に自らの正当性を求めたからにほかならない。西野に同情的な者が政府内にもいた。

このように近代国家の聖なる基軸をなす伊勢神宮は、前近代の、庶民に馴染みのお伊勢さんともまるで違う。ここでは、まずこの伊勢神宮がどのように形成されたのか考慮しよう。



「大廟」としての伊勢神宮

森暗殺のちょうど二十年前の明治二年に、明治天皇が伊勢神宮を参拝

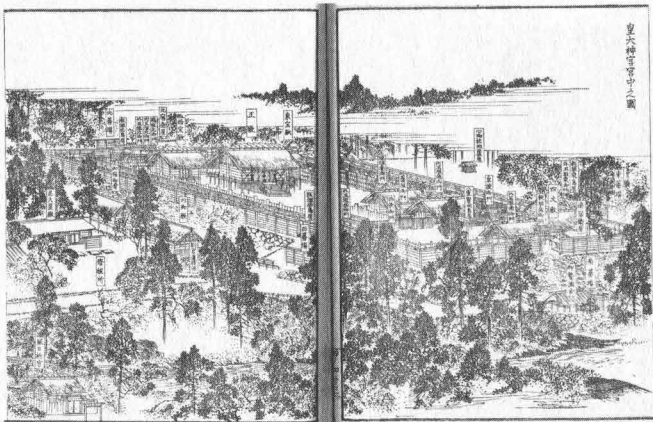


図1「内宮宮中」(『神都名勝志』、明治28年〈1895〉)。「包まれた空間」が注目される

した。それは、天皇による史上初の伊勢参拝。明治天皇は、のちに明治五年、同十三年、同三十八年にも参拝するが、このたび重なるドラマによって近代国家は神宮との結びつきをアピールし、万世一系の神話を決

定的に権威づける。天照大神が天皇の祖先だと、だれも否めない。

近代国家に欠かせないこの神話は、さまざまな角度から語られていく。

儀礼がそのための重要な戦略で、一月の元始祭、三月の祈年祭、九月の神嘗祭、十月の新嘗祭などはみな万世一系の神話を語るもの。天皇が皇居において執行するこれらの儀礼と神宮の祭主が執り行うそれとは、軌を一にする。このシンビオシス（共存）によって、皇居と伊勢、天皇と天照の新たな一体感が図られた。主たる儀礼は、全国すべての神社で執行され、近代日本の祭日にもなっていく。

改革されたのは、儀礼だけでない。神宮付近の空間が変貌する。仏教の宇治山田からの排除がその第一歩。二百五十前後あったとされる寺の大多数は、外宮所在地の山田にあり、浄土宗が多かった。天皇の歴史的参拝の直前から百八十もの寺が一夜

のうちに廃止された。仏教の存在は、万世一系の神話を否定するから、取り払われたのである。

また「宮中」の改革も衝撃を与えただろう。図1は、明治二十八年の内宮宮中だが、その「包まれた空間」に注目したい。核心の正殿は、瑞垣、内玉垣、外玉垣、板垣と四重にも包まれている。おもな建物は、瑞垣内の正殿や東西の宝殿。いかにも古代的に見えるこの景観は、じつは明治の産物である。江戸時代には、板垣、外瑞垣などはなく、参詣者が中重鳥居の辺を自由に行き来できた。宝殿も正殿と横並びになっていた。

この空間は、秩序だった空間でもある。それは、「参拝位置」の規定明治二十二年）を見れば分かる。それによれば皇族は内玉垣御門下、有爵者は同門外、貴衆両院議員は中重鳥居、町村長は外玉御門となる。天皇だけが正殿まで進む。「宮中」は近代国家の権力関係をそのまま反映す

る空間だ。このように変身する神宮は憲法発布後、君主の祖先の聖地としてふさわしく、「大廟」として概念化されていく。



「神都」としての宇治山田

明治の参詣者は、この馴染みのない伊勢神宮にどこまで魅^みせられたのか。一八八〇年代（明治十三〜二十二年）後半の宇治山田警察の統計によると、年間平均二十八万人の参宮

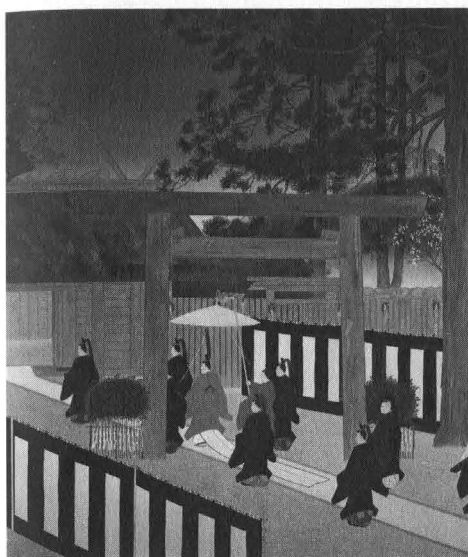


図2 明治天皇の伊勢神宮参拝を描いた「神宮親謁」（松岡映丘画／聖徳記念絵画館所蔵）

客が宇治山田の旅籠屋に止宿^{ししゅく}していた。この数は江戸時代の平均と比べて約半分。地元の有志たちが、政府に対し参宮鉄道敷設の運動を起すのはこの時期で、それが功を奏し、明治三十年に山田まで参宮線が開通する。その後、参宮者はようやく増え始める。

参宮客の激減の一因は、維新政府による伊勢御師^{おんし}の廃止にあった。近世の伊勢参りを支えたのは、七百家

ほどの御師がつくった全国参宮ネットワークである。彼らは参詣者の止宿、神楽の興行、神宮での祈禱^{きとう}、お札の頒布^{はんぷ}などをとりはからっていた。その活動の禁止、免職は、神社が、私有すべきでない国家儀礼の場だという法令（明治四年）により正当化された。そしてこの法令は、のちに「国家

神道」の大きな柱となる。

度会^{わたい}県（のちの三重県）は、旧御師に対し「忽ち正路に立ち返り」、農商に励むよう触れたが、多くは没落^{ふくろく}していった。福島太夫^{ふくしまたう}、久保倉太夫^{くぼくらたう}、三日市太夫^{みっかいちたう}など旅籠屋に転業して繁昌する御師もいたし、明治に評判^{かどや}だった「角屋」も「宇仁館^{うにかん}」も、旧御師経営の旅館であったが、それはごく一部だった。

参詣者の半減にともない、疲弊するのは宇治山田だけでない。外宮・内宮の間にある花街古市^{はなまちふるいち}の経営もますます困難になる。そうした宇治山田を救おうと立ち上がったのが太田小三郎^{おおたこさぶろう}など地元の実業家。彼らは、神宮空間のより徹底した改革と宇治山田のさらなる変貌を求め、明治十九年に神苑会を立ち上げた。

彼らは、宇治山田をまったく新しい「神都」としてつくり替えようとする。大廟の所在地にふさわしく、しかも参詣者の「娯楽」ニーズに応

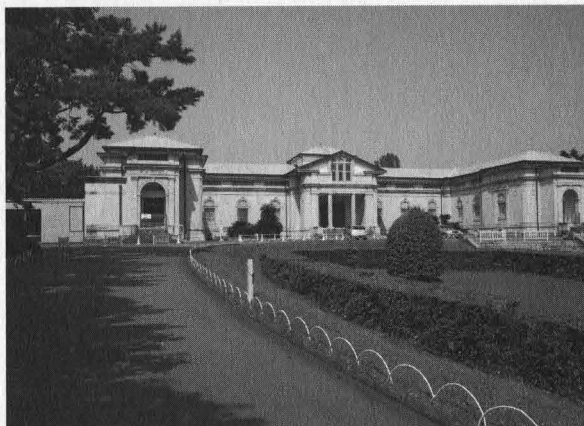


図3 日本初の歴史博物館として建てられた「徴古館」

えた神都。神苑会は、お店や家屋で
ごたごたしていた宮中接続の地域―
―内宮の場合、宮中から宇治橋まで
―を購入し、家屋を撤去した後、
「神苑」としての設計を図る。そこ
で明治二十一年末に太田、鹿嶋大宮
司、設計者の小沢圭次郎が上京し、
募金活動を開始。首都の憲法フイー

バーにつけ込んでか、想像以上の成
果があった。

有栖川宮熾仁親王が神苑会総裁

役を引き受け、三条実美内大臣、
松方正義大蔵大臣、渋沢栄一などが
神苑会に入つたのもこのとき。皇后

からも下賜金があった。このスポン
サーに支えられた神苑会は、一躍全
国的に知られ、募金も弾んだ。明治
二十六年末に内宮・外宮の神苑がや
つと完成を見た。我々が現在みる宇
治橋を渡つたところの内宮空間も、
勾玉池を特徴とする外宮空間もこの
ときにできた。当時の案内書は内宮
神苑を「四時の花木、色を争い、風
景の佳趣、最愛すべし」などと絶賛
した。

神苑会は、内宮・外宮の間にある
倉田山でも土地を買い、開拓したう
え、そこに博物館、農業館、古俗園、
書籍館、画廊、動物園、植物園、水
族館、競馬場、能舞台を建設し、外
宮と内宮を倉田山經由つなぐ新し

い道路をつくる構想もあった。参詣
者の娯楽を考えた、神苑会ならではの
ものだった。日清・日露戦争が勃
発し、資金募集が振るわなかったが、
明治四十二年にやっと神苑会の夢が
実を結んだ。

動物園、植物園、水族館、競馬場
は棚上げされたが、徴古館（日本
初の歴史博物館）、農業館（日本初）
そして式年遷宮で撤下された「御物
拝観所」は倉田山に立ちならんだ。
片山東熊設計の徴古館は、ルネッサ
ンス式で、その庭園も、ベルサイユ
をかたどつた西洋風。木造の農業館
は、それと対照的で、平等院鳳凰
堂がモデル。現在、この倉田山を素
通りする人が多いが、じつにユニー
クな空間である。

神苑会は、明治四十三年に倉田山
を神宮に献納し、解散するが、その
遺産はこの空間的改革だけでない。
宇治山田が「神都」と概念化されて
いくことも重要である。解散後「神

都製糸業」、「神都製陶所」、「神都鉄道」、「神都ビール」などが創立され、神都概念が全国的に広まる。

伊勢神宮がこう生まれ変わった裏には、多くの葛藤があつた。それは内宮と外宮、御師と三重県、宇治山田と東京、神宮と国家との間に見えた。次に見る出雲の近代化過程も、葛藤を抜きにして語れない。しかし、出雲がたどった運命は伊勢とまるで違つていた。



出雲大社の運命

明治五年に伊勢神宮は東日本、出雲大社大宮司の千家尊福が西日本の神道教化を政府から委託されたが、尊福は、すぐに政府とぶつかる。出雲大社こそ全国の神社を統轄すべき、祭神の大國主神は、天皇に劣らない神徳がある、とまで主張。全国の教化運動は東京の大教院を本拠地とするが、大教院は大國主神を祀らない。尊福はまたも抗議する。大教

院が明治八年に解散するや、神道事務局が神道教化の本場となるが、大國主神は合祀されなかつた。

尊福は、今度は伊勢や天照大神にも攻撃を加え、全国の神職を大論争に巻き込む。天照大神より先に拝むべきは、万物の創造主で、人間の靈魂に賞罰を与える大國主神だ、と。伊勢側は、その立場を、国体を乱す異端だと内務卿にまで訴える。明治十三年のことである。この「祭神論争」は、全国の神職に亀裂を生じさせ、しかも万世一系の神話を脅かすため、政府は勅命を以て神道大會議を東京で開く。それは出雲の抹殺に終わった。

政府は神をめぐる論争が二度と起きないよう、神社が神学、教化など「宗教的」行為に関わるのを禁じる。神社はもっぱら政府が定めた儀礼を執り行う場となった。そこで尊福は明治十五年に大宮司を辞して、これまで確立してきた信徒ネットワーク

を基盤に「神道大社教」を設立して、管長となり、独自に教化活動に励む（伊勢の大宮司も同時に神宮を離れ、神宮教を創立した）。

尊福が次に政府とぶつかるのは、保存金制度が導入される明治十九年。その制度は、政府が十五年間だけ出雲など官国幣社に「保存金」を支給し続けるが、その後経費を断ち切り、神社を自立させるものだった（伊勢神宮と靖国神社のみが例外）。尊福は、出雲大社の将来を保証するため、保存会をつくり、募金活動にのり出し、政府に出雲大社など神社待遇の向上を働きかける。

ここでは、尊福によるさまざまな活動から出雲大社、所在地の杵築町へと目を転じたい。明治期の伊勢は抜本的な空間改革を行ったが、出雲はどうだろう。まず明治四年に二千石もの領地を政府に没収され、千家などの屋敷も皆払い下げとなった。出雲大社は、同時に官国幣社と列せ

られ、政府が定めた国家儀礼を執行することになる。明治十四年に式年遷宮はあったが、杵築町の景観全体が変貌するのはこのときではなく、ずっと後の明治末年である。大社鉄道の敷設が決定的だった。



図4 遷宮直前の出雲大社を描いた「出雲大社御造宮仮遷座之図(明治十年)」(多田他著『神社仏閣地図』/国立国会図書館所蔵)

大宮司となった千家尊紀は早くも明治二十八年に鉄道の敷設を請願するが、出雲市から大社駅までの大社線がようやく開通するのは大正元年(一九一二)。それまで毎年七万人前後だった参拝者数が十七万人に急増し、その後年々増える。大社駅付近に旅館、運送業社、茶店がたつ。もなく堀川に宇迦橋が架され、その袂に鉄筋コンクリートの大鳥居がそびえ、次に駅から大鳥居までの神門通(幅一一・八メートル、両脇に二百八十本の黒松)も完成する。のちに演舞場も花街もできる。出雲大社を中軸にした杵築町が大正十四年に「大社町」と改称されるが、伊勢にならって「神都」を名乗り始めるのもこのときである。

外国人の見た伊勢と出雲

伊勢も出雲も近代国家の権力に抵抗できなかったが、伊勢が国家のものと聖なる場となったのに対し、

出雲は妥協を余儀なくされながら、独自のアイデンティティをある程度保持できた。このためか、明治期に来日した外国人は伊勢より出雲に親しみを持った。

著名なラフカディオ・ハーンは、明治二十三年に出雲大社を訪れたときその神秘性に感激した。日本は神国だが、もっとも聖なる所は出雲だと。ハーンは、逆に伊勢神宮に関心を示さなかった。外国人が伊勢神宮にはじめて感激するのは、明治期のチェンバレン、サトウらでなく、昭和八年(一九三三)に来日したブルノ・タウトだろう。タウト曰く「伊勢神宮には古代のままの詩と形が今なお保存されている」と。

【参考文献】

大社町史編集委員会編『大社町史 中巻』(二〇〇八年)
原武史「出雲という思想…近代日本の抹殺された神々」(講談社学術文庫、二〇〇八年)
ジョン・ブリン「神都物語…明治期の伊勢について」高木博志編『近代日本の歴史都市…古都と城下町』(思文閣、二〇一三年)